

小中連携を見据えた英語教育の在り方

—英語活動と連携した中学校第1学年の英語科カリキュラム試案の開発—

吉岡 健一郎

本市で進められてきた小学校英語活動では、「コミュニケーションを積極的に行う態度を養う」ことが大切にされ、様々な取組が行われてきた。このような英語活動を経験した子どもたちの英語に対する興味・関心と英語を活用しようとする態度とを、中学校の英語学習に効果的に生かすことが重要であると考えた。そこで本研究では、「言語機能」に着目し、「タスク」を活動の中心とし、英語教育がより充実したものになるように、現行の中学校英語科の教科書の言語材料やその配列などの要素を踏まえて検討した。そして、「言葉で人とかかわることの大切さを実感」できるような、小学校英語活動と連携した中学校第1学年のカリキュラム試案を開発した。

第1章 英語活動から英語科を考える

第1節 英語教育の現状

平成20年3月28日に小学校学習指導要領が告示された。新しい小学校学習指導要領では、平成23年度から小学校第5・6学年で「外国語活動」が導入されることとなった。

小学校英語活動で培われた、子どもたちの英語に対する興味・関心や英語を活用しようとする態度を、中学校の英語学習に効果的に生かすためには、英語科カリキュラムの開発が必要だと考えた。そこで、小学校に外国語活動が導入されるまでの、過去20年ほどの外国語教育をめぐる動きを整理した。

また、平成15年に国立教育政策研究所の教育課程研究センターが実施した、教育課程実施状況調査の質問紙調査集計結果（中学校英語）から中学生が英語を学習することについてどのように考えているのかを探った。調査結果を見ると、これから生きていく上で「英語は大切だ」という意識をもった生徒が多いということがわかった。（表1）

表1 教育課程実施状況調査 中学校（英語）

設問	学年	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない	分からない	その他	無回答
1-(2) 英語の勉強は大切だ	1年	61.0	23.0	6.3	6.7	2.6	0.1	0.4
	2年	58.1	24.7	6.5	7.8	2.4	0.0	0.5
	3年	60.3	23.7	5.8	7.5	2.1	0.0	0.5
1-(3) 英語の勉強は、受験に関係なくても大切だ	1年	55.8	23.5	8.3	7.4	4.3	0.1	0.7
	2年	53.8	24.2	8.7	8.8	3.8	0.0	0.7
	3年	57.8	23.0	7.4	8.0	3.0	0.1	0.6
1-(6) 英語を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ	1年	44.9	25.1	11.2	9.9	8.9	0.1	0.5
	2年	41.9	25.4	11.8	11.8	8.4	0.1	0.5
	3年	44.6	24.3	10.7	12.1	7.0	0.1	0.4
1-(10) ふだんの生活や社会に出て役立つよう、英語を勉強したい	1年	40.2	24.4	13.8	11.4	8.8	0.2	0.6
	2年	37.3	25.6	14.3	13.8	8.6	0.1	0.5
	3年	40.7	25.2	12.8	14.4	7.1	0.1	0.5

← 肯定的な回答をした割合 否定的な回答をした割合 →

第2節 試案の開発に向けて

本市総合教育センター研究課での小学校英語に関する先行研究を振り返ると、これらの研究が、今日の本市の小学校での英語活動の基になっていることがわかる。その原点に立ち戻って、小学校での英語活動の経過を踏まえて、中学校第1学年の英語科のカリキュラムを考える必要があると考えた。

そして、このカリキュラムを考える必然性の根拠として、「小学校英語活動で培われた指導内容や指導方法を生かしてコミュニケーション能力を育成する」ことを挙げた。

第2章 英語活動と連携した中学校第1学年の英語科カリキュラム試案

第1節 言語機能を軸として

私たちは、言葉を使って自分の思いや考えを伝え合う。その際に使用するそれぞれの言葉には働きがあり、その働きは、「言語機能」とよばれている。

本市で進められてきた英語活動のカリキュラムは、言語機能を学習の軸に据え、考えられている。学習指導要領の改訂で、「言語の働きの例」が小学校、中学校、高等学校の全校種で五つずつ挙げられている。このことから、言語の働きの重要性をあらためて意識し、言語機能を軸として、中学校第1学年のカリキュラム試案を考えた。

そこで、英語活動テキストと中学校英語科の教科書で扱われる文を言語機能ごとに分類し、どのような言語機能の文を学習することが求められているのかを学習指導要領の言語活動から挙げてみた。そして、中学校3年間で扱う言語機能の割合を筆者がシミュレーションをして図示した。（図1）

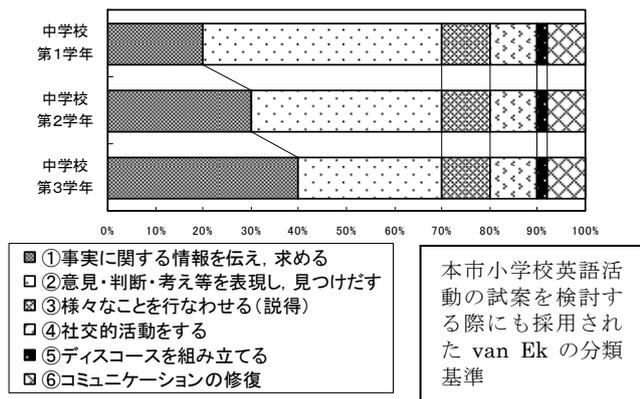


図1 言語機能割合イメージ図

第2節 タスク

実際のコミュニケーションにおいては、その場面や状況に応じて、相手のことを考えてコミュニケーションを図っている。したがって、その時々にあった適切な表現の仕方を工夫することが必要である。すなわち、生徒が、活動を通して、相手に自分の感情や意思を表現したり、相手の意向を尋ねたりするなどのコミュニケーションの機会を繰り返し体験することができるような活動が必要だと考え、タスクを活動の中心に据えた。

ここでは、タスクのタイプを整理し、タスクを達成するために、どのような学習の流れを考えておかなければならないか。また、タスクと連動して、どのような話題を用意することが効果的なのかということも合わせて検討した。

第3節 カリキュラム試案

教科書の内容には、生徒が行ってきたタスクとは違い、自分たちの想像力を働かせて読み進めなければならないものがある。

そこで、自分の感情や意思を表現したり、相手の意向を尋ねたりするようなタスクと教科書を活用することで、より一般化したコミュニケーションが図れるのではないかと考えた。

さらには、カリキュラム試案の年間計画表を提示し、工夫した点や音声指導と辞書指導も加えて、これらについての考えを述べた。

第3章 実践授業での生徒の様子と

見えてきたもの

第1節 言語機能を意識する実践

この実践授業でのタスクは、各グループで遠足の持ち物を話し合ったり、地図を見ながら、そこでどんな遊びができるかを考えたりすることである。これを踏まえて、お薦めの遠足のプランをグループごとにプレゼンテーションを行う実践授業

を行った。

はじめに、指導者がプレタスクで使ったモデル文を示し、タスクでのグループ活動の進め方やワークシートの使い方などの説明をした。

次に、一人で、プレタスクで出てきた can や can't を使いながら、遠足に持ってくるができるもの、できないものを考えてプリントに書き込んだ。

その後、各グループに分かれ、意見を出し合った。

自分の意見や考えなどを表す言語機能を配列することで、生徒は can を使って自分たちの思いを英文にしていた。また、書くことだけでなく、音声として、グループでの話し合いの中で can を使う姿が見られた。



図2 グループで話し合っている生徒たちの様子

第2節 身近な話題を生かすタスクでの実践

ここでは、友だちとのインタビューを通して得た情報を第三者に伝えるタスクを考えた。

このタスクでは、自分のもっている情報を第三者に伝えなければならない。したがって、相手に伝えるためには、主語を変えたり動詞の形を変えたりすることが必要になる。文法事項としては三人称・単数・現在や代名詞を扱うことになる。「友だちのこと」を話題としたが、タスクを生かす話題を考えることは、生徒が意欲をもって活動に取り組む要素の一つとなったといえる。

第4章 英語教育の小中連携をめざして

第1節 カリキュラム試案を試行して

この研究では、小学校英語活動で大切にされている「聞くこと」「話すこと」といった音声中心の活動を、「書くこと」「読むこと」が始まる中学校の英語学習に結びつけることが重要である。

実践授業では、4技能をつなぐことを試みとして行った。

第2節 枠組みを考える

今後とも、実践を繰り返す中で、カリキュラムの検討を続けるとともに、より小中連携に生きる試案を作成したいと考える。